

A historical map of Mount Fuji, showing the mountain's profile with various paths and stations marked. The map is oriented with the mountain peak at the top. A small diamond-shaped label with the character '山' (mountain) is visible on the left side.

吉田口

登山道と御中道

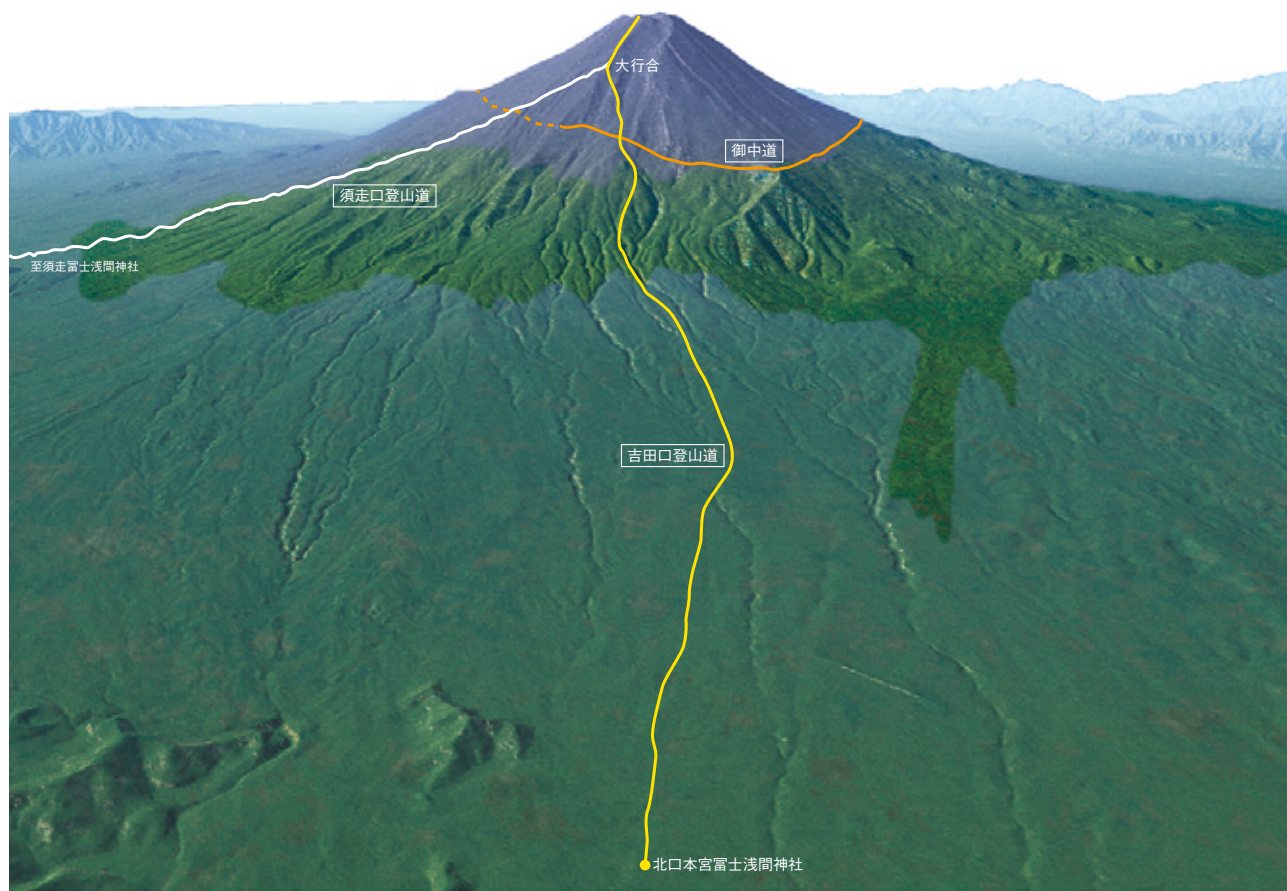


山梨県立富士山世界遺産センター

北面の登拝拠点・吉田

吉田は富士山の北麓に形成された中世からの町場である。山体を遙拝する鳥居（富士山大鳥居、現在の北口本宮富士浅間神社境内に建つ）の前方に展開した登拝拠点の集落で、富士御師や神職たちが集住した。御師の活動は、16世紀から確認できる。

江戸時代に入ると、公には「上吉田村」といい、「吉田町」と通称された。町の入口（北端）には、登山改役所（資料番号2では、「登山人員取扱所」）があって、道者（登拝者）を改めた。天明8年（1788）、ここに銅鳥居（現在の金鳥居）が建造されている。これより内側（南側、富士山側）に道者を受け入れた町場が広がり、その南限には富士浅間明神（現在の北口本宮）が鎮座する。江戸時代には本殿裏の登山門が登山道の起点とされたが、明治末年（明治45＝1912）に至って、金鳥居の脚下に「登山道里程元標」が山梨県によって設置され、ここを出発点とした。



富士山（25カ所の構成要素・構成資産）が世界文化遺産に登録された2013年（平成25）6月から、満5年が経過しました。山梨県では2008年度より富士山にかかわる総合学術調査を推し進め、その成果を、文化庁へ提出した推薦書原案（2011年7月）やユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界遺産センターへ宛てた保全状況報告書（2016年1月）に反映させてまいりました。ことに後者に関連して、各地から構成資産各所に至る、あるいは各構成資産間をつなぐ、いわゆる「巡礼路」の特定に力を注いできたところです。2016年6月の開館以来、先述の学術調査にあたっている当センターにおきましても、継続して〔道〕の調査に取り組んでおります。

調査の過程で、富士河口湖町河口に伝来した2冊の絵画集に行きあたりました。吉田口登山道・御中道の要所要所を、それぞれ58葉と24葉の着色画で紹介しています（資料番号5・6）。吉田口登山道にかかわる絵画資料としては、「富士山明細図」の書名をもつ5の異本や『富士山真景之図』（弘化4年〈1847〉版行）、『不二山道しるへ』（万延元年〈1860〉版行）などが広く知られていましたが、江戸時代にさかのぼる御中道を取り上げた絵画資料6の出現には驚かされました。今回の企画展では、両書に収められた図葉のいくつかを写真で示し、関連資料を提示することで、吉田口登山道・御中道という二つの道について考えていこうと思います。また、登山道を図中に収めた村絵図を通じて、山麓に暮らす人々が富士山に対して抱いた意識についても、合せて考えてみたいと思います。

2018年（平成30）7月

山梨県立富士山世界遺産センター



2
富士山北口本宮富士嶽神社境内全図 個人蔵
明治25年（1892） 銅版刷、縦42.0cm×横57.9cm

富士嶽神社（北口本宮）の境内と富士山への登拝拠点集落の吉田（上吉田）を描く。登山道は神社の裏手の登山門から、原と呼ばれる萱野を抜け、馬返に至る。ここから木立（森林帯）に入り、やがて森林限界を抜け、毛無（火山礫帯）へと続く。



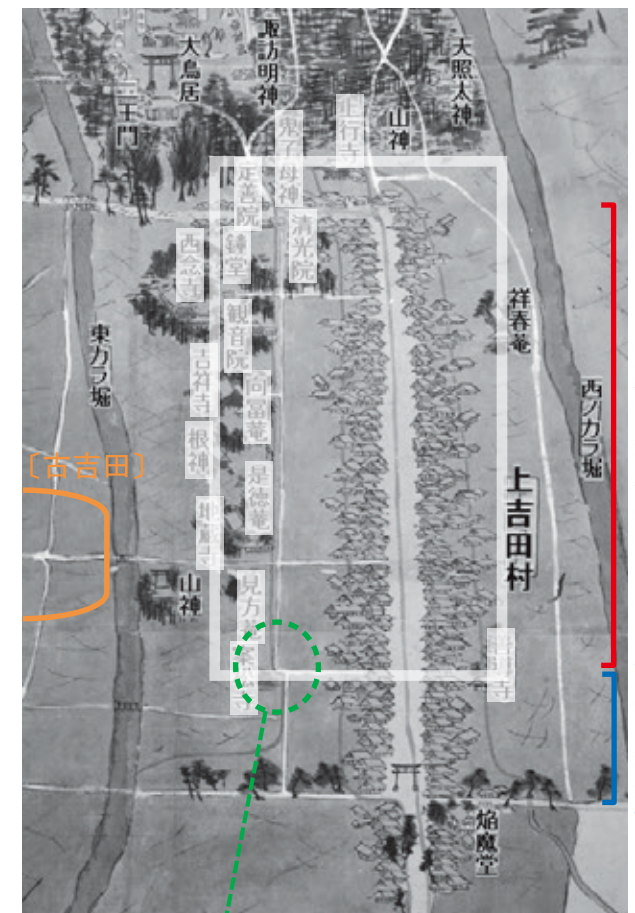
1 上吉田村絵図 個人蔵
江戸時代(19世紀カ) 全高114.2cm×全幅111.7cm

北面の登拝拠点である吉田(上吉田村)を描く。村内の数カ所から富士山へ向かう道が見える。それらの多くは富士浅間宮(現北口本宮)の社叢(諏訪森)内で合流、絶頂(山頂)を目指す。「馬カヘシ」(馬返)にかけて「山始」とあるのは、ここから信仰領域に入ることを意味している。八合目の「大行合」より上位についてあって注記を略すのは、俗界を描く村絵図には適さないとの判断に基づくものだろうか。

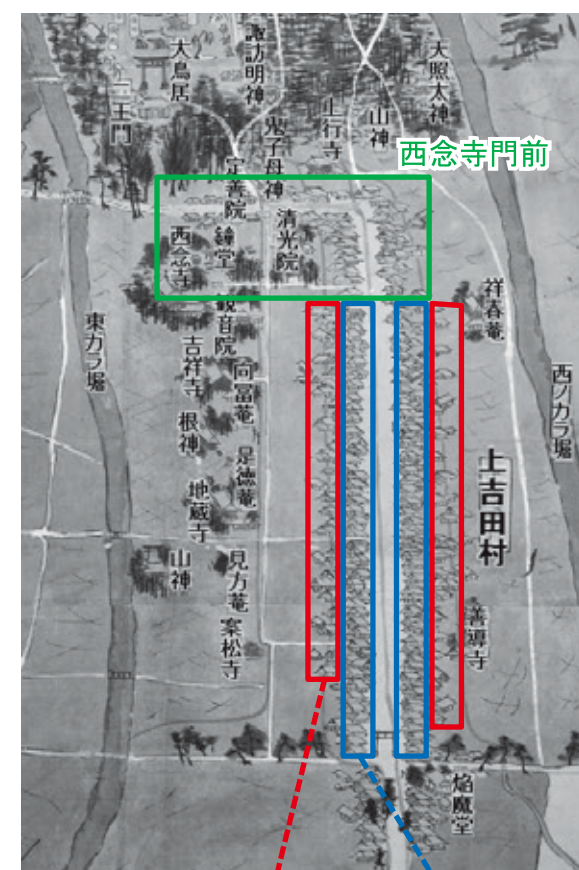
〔絵図にみる吉田町〕

「上吉田村絵図」(資料番号1)は、制作年代こそ江戸時代の後半にくだるとみられるが、吉田町と通称された上吉田村の様相を忠実に描いた絵図として貴重である。

江戸時代の町は、元亀3年(1572、武田信玄死没の前年)に「古吉田」と呼ばれる旧地から移転、再編されたことに起源をもつ。案松寺と善導寺を結ぶ東西街路より南方(富士山側)が当初のもので(現在の上町・中町)、これ以北(下町)は慶長11年(1606)に延伸された部分である。元亀年間の吉田は、東西を天然の空堀に挟まれ、北辺には人工の堀と土塁を設けた、総構をもつ町であった。元亀年間の都市設計には、奈良や京都の町と同様に「丈」の単位が用いられた。一方、慶長年間には「間」が用いられたため、両者の間にずれが生じ、これが街区東側背後の裏道(東裏)に「ひずみ」となって表れた。



「ひずみ」



御師坊

町屋

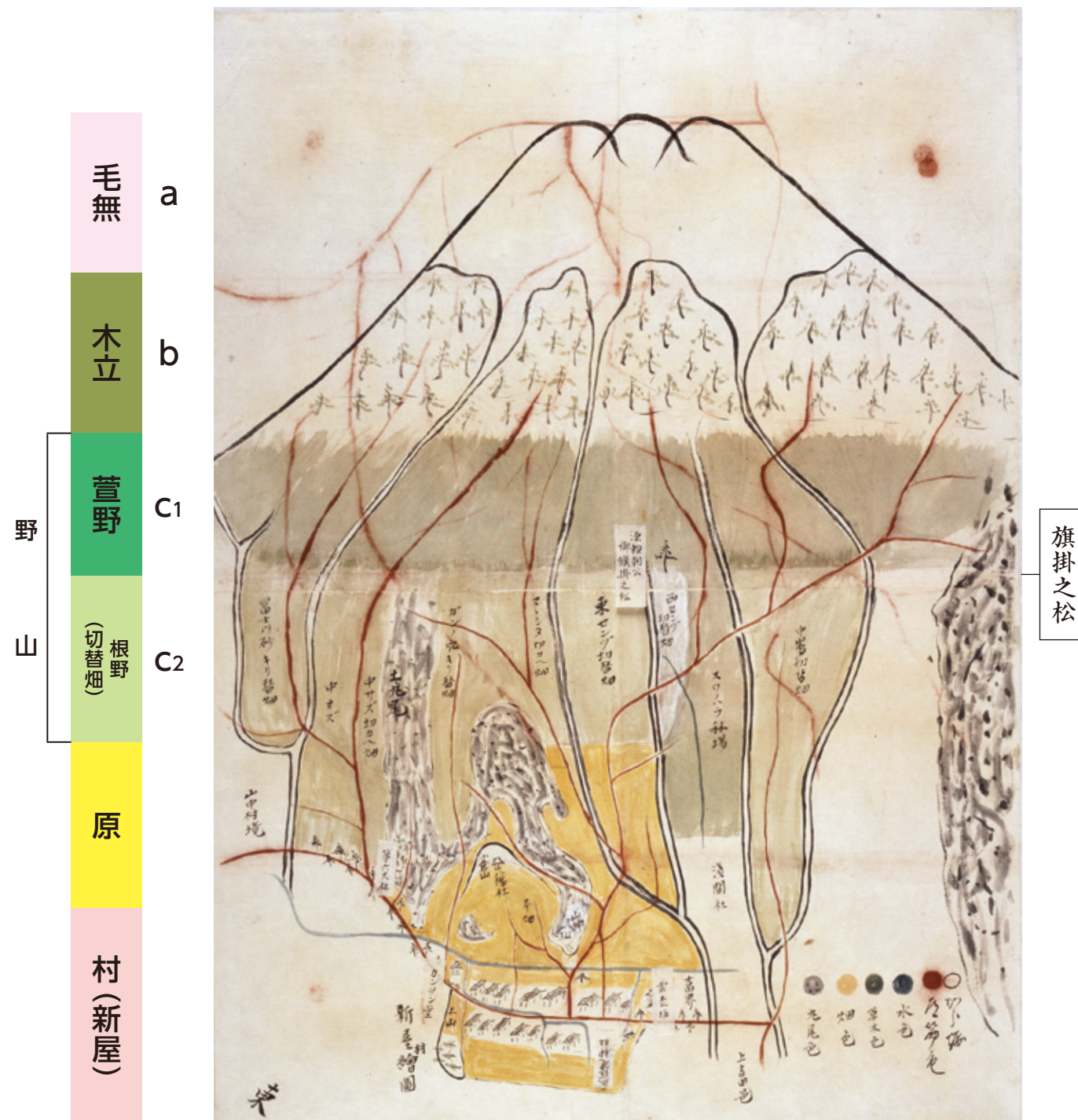
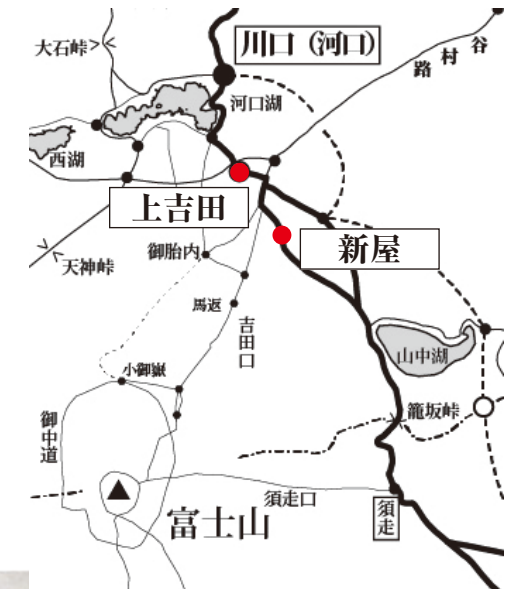
吉田町は、①御師坊とその門前からなる部分、②時宗寺院西念寺と門前からなる部分に大別できる。

- ①は、銅鳥居(天明8年<1788>建立、現在の金鳥居)の建つ町の北端から西念寺の大門にかけて1km余にわたって続く。表通に直行する形で東西両側に短冊状に屋敷地が地割されたが、南北の高低差が著しいため、各地割はさながら雛壇の様相を呈していた。また、各地割にあってはタツミチ(引込路)の奥に御師坊が建ち、表通に沿っては町屋が軒を連ねるといった複合的な町を構成していた。
- ②には西念寺の塔頭のほか、表通に面して町屋が建ち並ぶ。この付近には、現在も富士山中の山小屋や室の小屋主が居住している。西念寺は富士参詣の道者から奉加を受けることで伽藍を維持してきた(西念寺文書)。これらの事実は、西念寺と富士山との深いつながりを示すものといえよう。

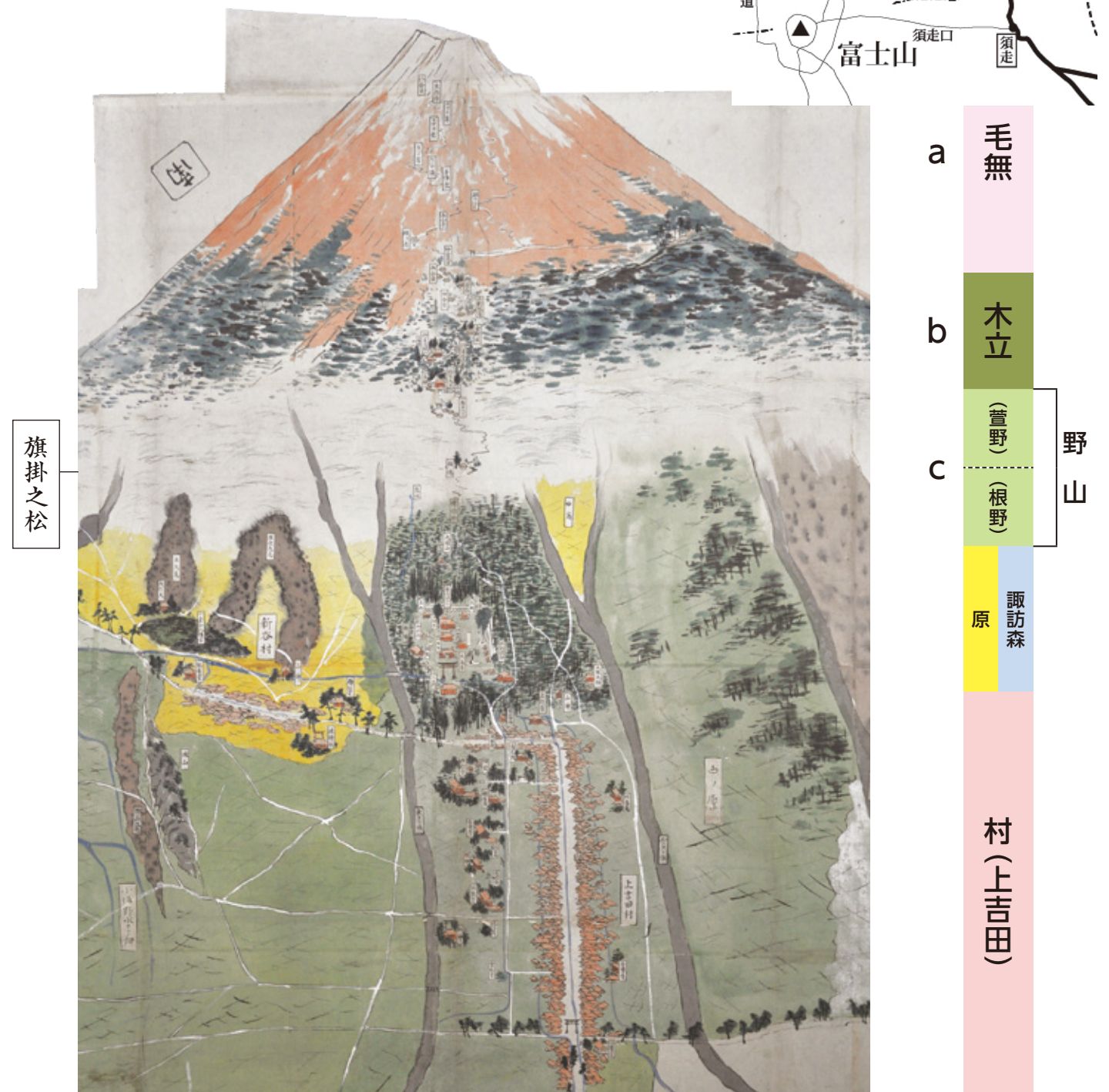
吉田口登山道の空間認識 ～二つの絵図から～

ほぼ同時期に描かれた隣接する二村の村絵図である。双方とも、色こそ違え、富士山の山容が三層に描き分けられて士北麓に暮らす人々に共通していたようだ。住人の生活に大きな意味をもったのが、区分cの〔野山〕である。富士山のいった非農林業人口の多い上吉田村に対し、農林業従事者が多数を占める新屋村にあっては、〔野山〕に対する意識として利用される根野（壑野）で、c1は緑肥としての刈敷や畑に鋤込む刈草、秣を採集する萱野である。なお、源頼朝に着目すべきだろう。

いることに気づく(a～c)。植生に基礎を置く領域区分=領域認識は、富登拝拠点で、御師が全戸の1／4を占めるほか、町屋の住人や神職とはより強く、これを細分している。c2は「切替畑」(一時的な耕作地)とまつわる由緒を伝える「旗掛之松」がc1・c2の境界とされている点にも



参考資料
「新屋村絵図」(文化3年・1806)〔旧森嶋家資料〕 都留市蔵



1
「上吉田村絵図」(19世紀カ)

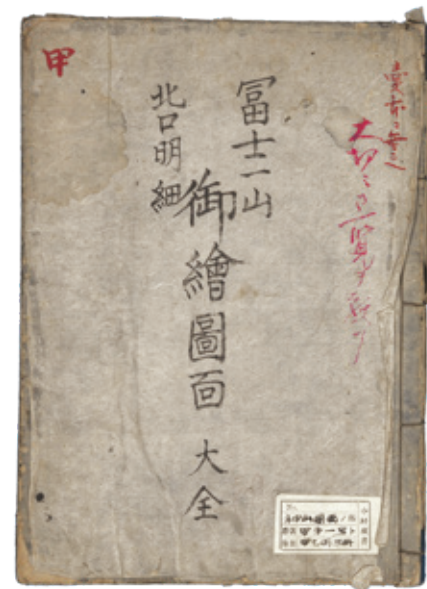
吉田口登山道・御中道を描く



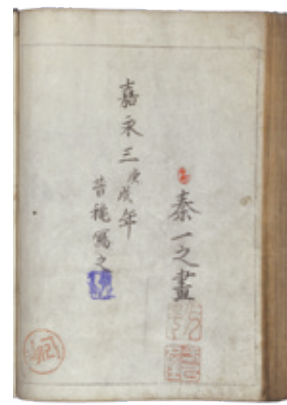
「川口湖」



「御中道申方 大難所無明橋」



(表紙)

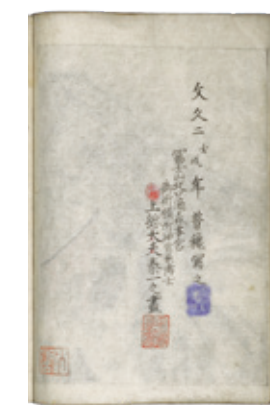


(奥書部分)

河口御師・中村家（現屋号は甲州屋）に伝来した肉筆の絵画集。麓から頂上まで吉田口登山道の要所要所を描く。裏表紙に付された覚書に「先祖が是を図す二」とあり、奥書に見える秦一は中村氏の祖先と伝承されていたことが知られる。類本に吉田御師・小沢隼人寛信の筆になる「富士山明細図」がある。「明細図」が収める56葉に先立ち、富士浅間の縁起、「川口湖」「川口駅」（実は河口浅間神社）の二葉を付加するのは、河口御師の手になるがゆえであろう。「明細図」にくらべると、余白に漢詩や和歌・俳句を書き込むなど書物としての完成度は高い。一方、画の表現には形式的な一面も見受けられる。共通の祖本が存在したのだろうか。

4 富士山北口明細御絵図面 個人蔵
嘉永3年(1850)写 紙本彩色、縦27.4×横19.5cm、全65丁

4とともに河口御師・中村家に伝わった。富士山御中道の要所を紹介する肉筆絵画集。奥書には「上総大夫秦一之画」とある。合せて中村家にのこる「神道裁許状」には、中村上総太夫秦一の名があり、秦一を同家の先祖とする先の推定を裏づける。全24葉のうち、冒頭の「富士北口登山五合目」など、吉田口登山道や小御嶽神社の周辺を描く8葉は、4所収の図葉に一致する。奥書の「写之」から、祖本の存在が想定されるが、類本は知られていない。なお、中村家には3冊の画集が伝来していたようだが（甲～丙）、丙にあたる1冊は確認できない。



(奥書部分)

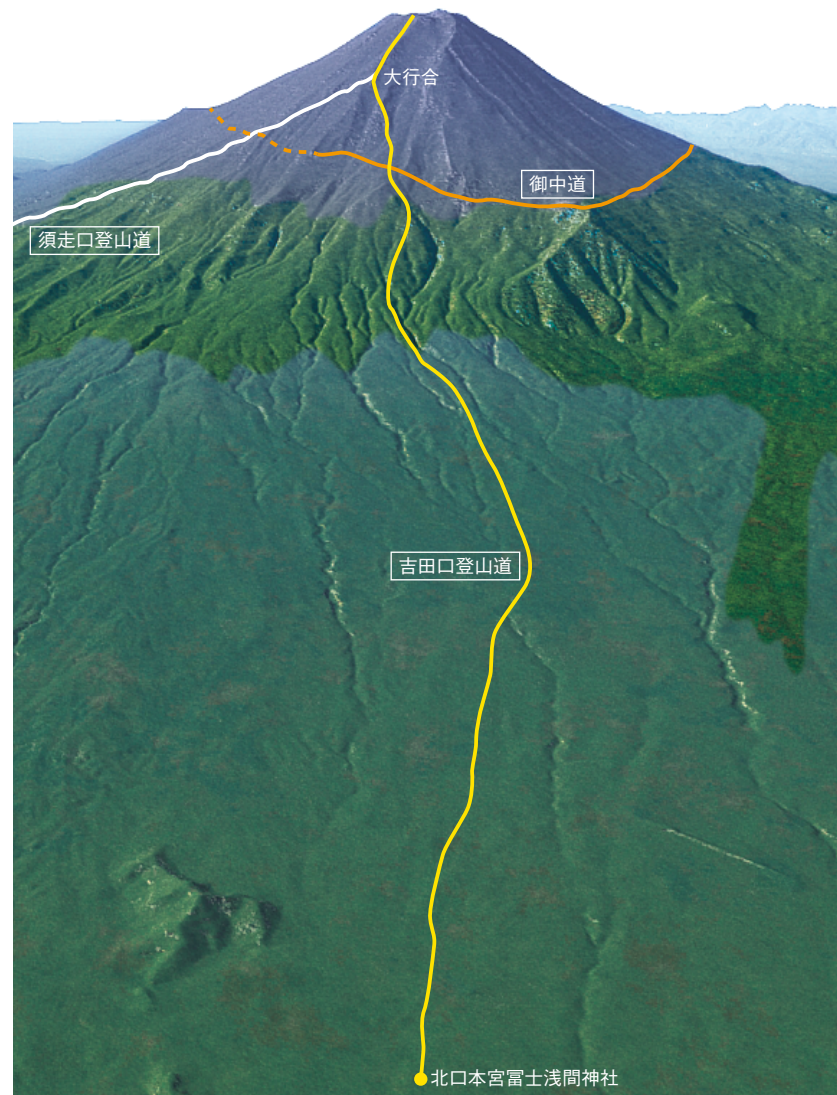


(表紙)

5 富士山御中道圖 個人蔵
文久2年(1862)写 紙本彩色、縦27.1×横18.7cm、全27丁

吉田口登山道 1

富士山の北面に開設された登山道を吉田口（北口）登山道という。吉田（富士吉田市上吉田）を登拝拠点として、諏訪森・浅間宮社（北口本宮）から野山（耕地や里山として利用される領域）、さらには木立（森林帯）・毛無（火山礫帯）の両地帯を貫いて、頂上の薬師岳（久須志ヶ岳）に至る。



二合目 おむろ 小室浅間社
木立のなかの修行の拠点＝「室」で、「小室」「北室」と呼ばれた。



鈴原御馬返シ

ここから道は木立（森林帯）に入る。鳥居の下で登拝者が笠を取り、正座して頂上を拝している。



三里ヶ原始

諏訪森を出て馬返までの萱野を江戸の富士講は「草山三里」と呼んだ。



【中ノ茶屋南方林中の道標】

（江戸時代後期カ）

御山（富士山）へ向かう「のぼりみち」（登山道）は何度も付け替えられている。中ノ茶屋付近では、現在の登山道（国史跡）の東方に、先行する道があったようだ。これを示すのが、写真の道標である。登拝者が薪や粗朶を採取する入会地へ迷い込むのを防ぐために立てられたのだろう。現行登山道は、この道標の西側を緩やかなカーブを描いて大石茶屋へ向かっている。



左 御山のぼりみち
右 たきざとりみち

吉田口登山道 2

木立（森林帯）と毛無（火山礫帯）の境界付近を「^{てんちのさかい}天地境」という。ここに祀られた中宮三社の一社である浅間社を過ぎると、登山道は砂振（砂払）^{すなふり}經由、^{すなはらい}経ヶ岳經由の二道に分岐する。両道は穴小屋（六合目）で合流し、^{おおいき}大行合（八合目）へと向かう。須走口登山道との結節点で、ここから上位は八葉＝神仏の住まう場と認識されていた。



〔頂上 久須志神社〕

北口絶頂（山頂）の薬師堂と改役所は、明治初年の神仏分離ののち、「ヤクシ」を「クスシ」と呼び換え、富士山本宮浅間大社奥宮の末社に再編された。

天地境浅間宮（小御嶽一ノ鳥居）

「天地境」に祀られた中宮三社（浅間社・大日社・稻荷社）のひとつ。西方へ向け小御嶽神社の参道が延びる。



頂上薬師ヶ嶽役場

吉田口頂上。「嶽薬師」という。薬師堂と改役所が描かれる。



八合目

東方（左）から延びる「駿河国須走道」（須走口登山道）との合流地点で、「大行合」という。

五合五勺砂振

小屋の右（西方）に二筋の道が見える。その右側（西側）は下山道で、二人の道者は、八合目から「砂走」（吉田大沢）を駆け下りてきたようだ。

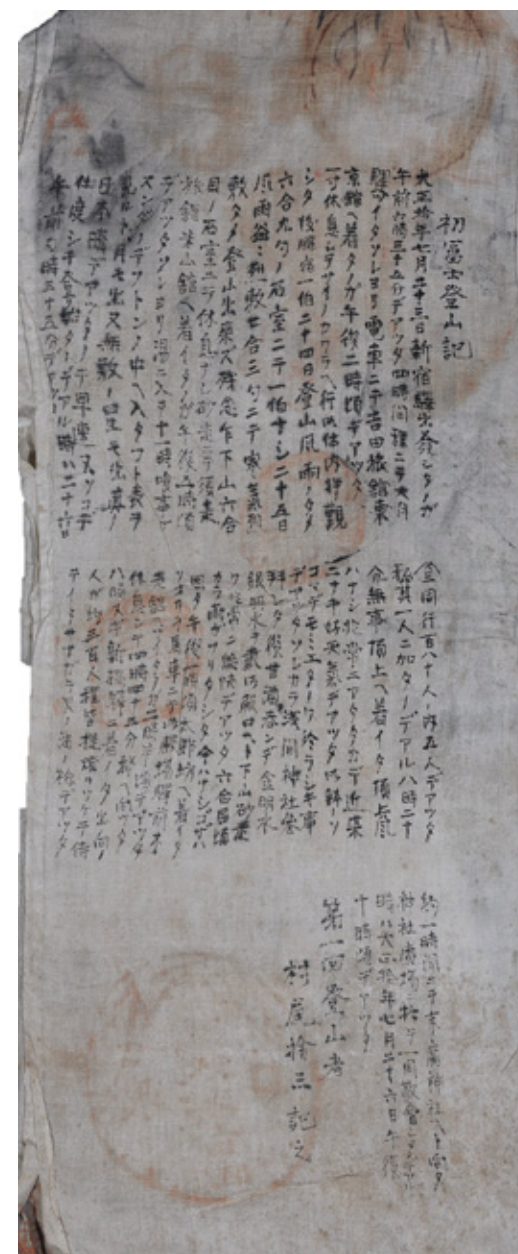


3
行衣(麻布山三講・村尾捨三氏所用)
大正時代(1912~26)
当館蔵

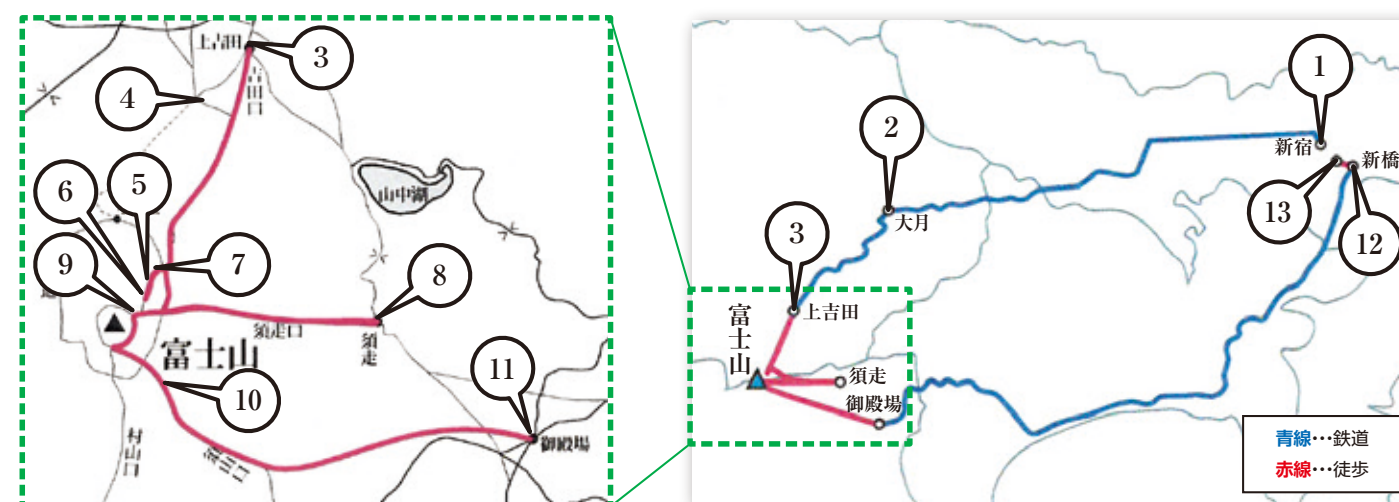
富士講中が身に着ける白衣を行衣ひやくえ ぎょうえという。この行衣は麻布山三講の講員であった故村尾捨三氏の遺品。江戸(東京)の富士講が用いた行衣の典型で、細帯を巻く。背中や袖には、富士の牛王宝印を版刷りしている。大正10年(1921)7月に初回登頂を果たした村尾氏は、行衣の内側にその模様を詳細に綴っている。

行衣裏書にみる富士講講員の登拝

- 大正10年
7月23日 6:35 ①新宿駅を出発
10:35 ②大月駅に到着
14:00 ③吉田旅館「東京館」に到着
サイノカワラにしのおほり(西大堀、現在の宮川上流部)を通過
④御胎内(吉田胎内)を巡る
吉田旅館に帰宿
7月24日 登山開始
⑤風雨のため六合九勺の石室で一泊
7月25日 ⑥風雨、寒気が激しいため、七合三勺(太子館)で引き返す
⑦六合目の石室(穴小屋)で休息、砂走(下山道)を下る
17:00 ⑧須走旅館「米山館」に到着
7月26日 0:35 晴れたため、支度をして、須走口より登山再開
8:20 無事に頂上へ到着
⑨浅間神社(久須志神社)へ参拝
御殿場口を下山
13:00 ⑩太郎坊に到着
14:30 ⑪御殿場駅前「不老館」に到着
20:00 ⑫新橋駅に到着
21:00 ⑬末広神社(赤坂四丁目末広稲荷神社)に到着
22:00 末広神社広場で解散



行衣裏書



※太郎坊～御殿場駅は、馬車を利用。

御中道 1

御中道の起点は、六合目の穴小屋（現在の雲海荘別館）とされること（現在の雲海荘別館）とされること（現在の雲海荘別館）が多い。しかし、「甲斐国志」（19世紀初頭）はその下方の不浄岳、あつては逆に上方の七合目取附と林帯）と毛無（火山礫帯）の境界宮三社が祀られていた。登頂を（吉田大沢）を駆け下りた。②到達地の「砂振」から登山道を取って返し、③穴小屋あるいは④七合目取附から御中道に立出た。



④七合目取附(従是御中道)



③六合目穴小屋



②北口登山(五合五文目砂振)



①富士北口登山五合目
(天地境浅間宮、小御嶽ノ鳥居)



〔現六合目より山頂を望む〕

開山中は現六合目(旧五合五文)の砂振小屋跡に隣接して富士山安全指導センターが設置されます。

当センター所属の富士山レンジャーは、開山期は山内にあって、登山者に対する普及啓発活動に取り組んでいます。

御中道 2

北面の吉田口から、東面の須走口、須山口（現御殿場口）、さらには南面の大宮口（現富士宮口）へと、時計回りに巡った。東面では宝永4年（1707）の噴火によるスコリア（火山砂礫）が深く、道筋ははっきりしない。南面では森林限界の上方を通行する。



⑦御中道辰方（須山口六合目）



⑧御中道巳方（宝永山大名岳）

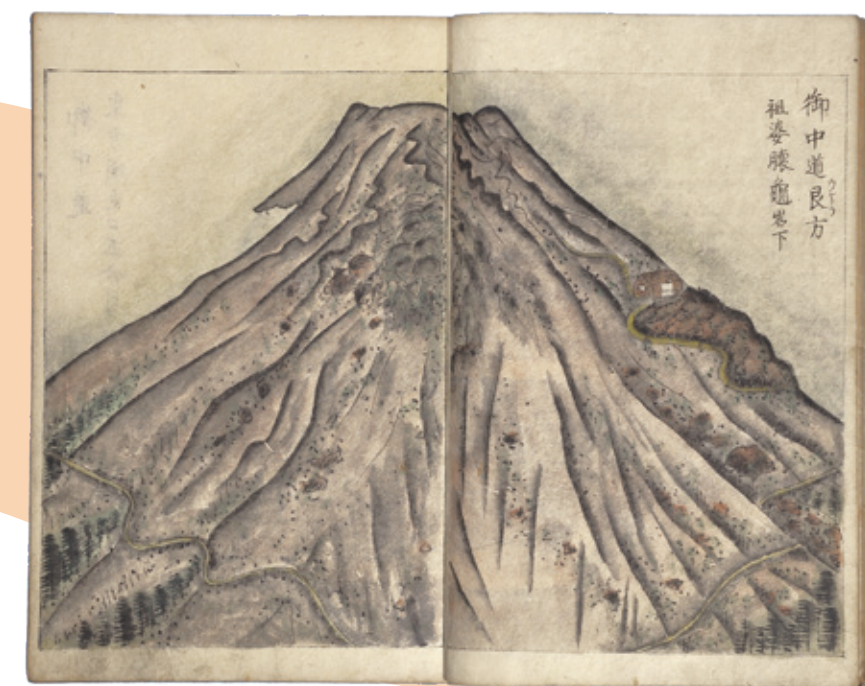


⑥御中道（東方須走口五合目）



⑨南方大宮口五合目

大宮口登山道と御中道が結節する地点には、御中道室があってひとつの指標となっていたが、現在では撤去され、わずかに平坦地が認められるにすぎない。



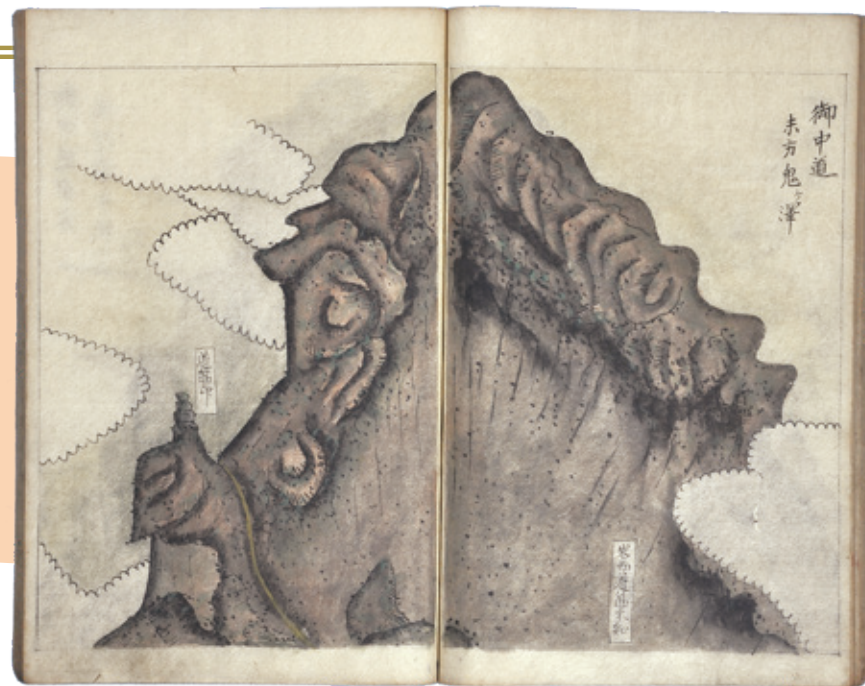
⑤御中道良方（祖婆懷龜岩下）



〔「御中道」の装束〕

御山へ向け出発する敬神講の記念ほか。彼らが携行する長い杖を「中の相違がうかがえ、興味深い。敬神

写真。鉢巻姿で八角の金剛杖を携行する者にまじって、頭に宝冠（ほうかん）を戴き、自然木を持つ者が5名認められる（後列右端道杖と呼ぶ。5名は、登頂後、「御中道」（中道の巡拝行）を予定していたようだ。「御頂上」（登拝）と「御中道」の装束講は吉田御師菊谷の講社。



⑩御中道未方鬼ヶ沢



⑪御中道申方 役行者手杖流シ

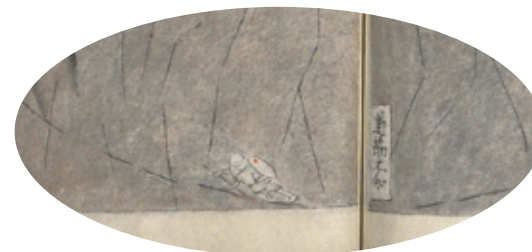


⑫御中道申方 大難所無明橋

大沢室発行の絵葉書にも見える「天ノ浮橋」は、⑫「無明橋」の後身という。懸橋を前に行者が笠を取り、合掌する姿が描かれている。

御中道 3

前掲⑨の御中道室を発つと、大沢^{おおさわくずれ}（大沢崩）北岸（右岸、山梨県側）の大沢室（大沢休泊所）まで、3里（約12km）にわたって腰をおろして休憩できる施設はなかった。大沢南岸（左岸）に達する間にも、鬼ヶ沢、手杖流^{しゅじょうながし}など大小の沢を越したほか、「無明橋」と称する懸橋^{むみょうのはし}（栈道^{かけはし}）を経由する必要があった。また、「不動石」「金剛石」といった巨石や奇石が信仰の対象となっていた。いずれにせよ、西方山腹は大小の沢が連続し、道筋も不安定だったため、⑪のように道筋を描く図葉にまじって、⑩や⑭のようにケルン状の「道筋印」「道印石」を描くものが散見される。



⑬・⑭間の「御中道戌方 大滑沢^{おおなめざわ}」と題する図葉には、「道筋不知」＝道なき道を這いつくばって進む道者の姿が描かれている。



資料6として取り上げた「隔搔録」も大沢の横断を絵入で紹介する。同書は不動石の対岸に毘沙門石を描き、不動石と金剛石を描く「富士山御中道図」（資料5）とは認識を異にしている。19世紀前葉（資料6）と中葉（資料5）で、大沢を越えるルートに変更があったのだろう。地形の変貌の激しさを物語っている。



⑭御中道戌方 滑沢三沢有之



⑬御中道西方 第一大難所大沢御前

御中道 4

最大の難所である大沢(大沢崩)を越えた御中道は、森林限界に沿って進み、「御庭」付近で安定する。⑮の「御庭」の辺りは歩行も容易だ。隣接する「奥庭」ともども、天狗の遊び場と認識されていた。天狗は⑰に描かれる小御嶽神社の祭神のひとつである。「御中道図」は、「横吹」あるいは「小御岳道」と呼ばれた小御嶽神社の参道を東行し、⑲のように吉田口登山道と小御嶽神社の参道が結節する「一ノ鳥居」を御中道の「大尾」=終点とする。しかし、本来の御中道は、泉ヶ滝から吉田口六合目に向かう。「ひも合」の呼称のとおり、富士山中腹を紐で結ぶように巡廻するのが御中道である。⑲にも、砂振小屋に向けて延びる道が描かれている。



⑲北方小御岳一ノ鳥居 御中道大尾



⑰御中道北方(小御岳鳥居前)



⑱北方小御岳横手 泉ヶ瀧



⑮北方 小御岳御庭



⑰小御嶽石尊大権現社(加祭 大天狗・小天狗)



〔御中道 泉ヶ滝付近〕

現在では、多くの登山者が富士山有料道路(富士スバルライン)を利用して小御岳から山頂を目指します。御中道を東行し(写真右)、六合目(旧五合五勺)の砂振小屋跡(富士山安全指導センター)付近で吉田口登山道に結節します。途中、泉ヶ滝付近で、吉田口五合目(天地境)方面へ向かう小御岳道(横吹、写真左)と分岐します。

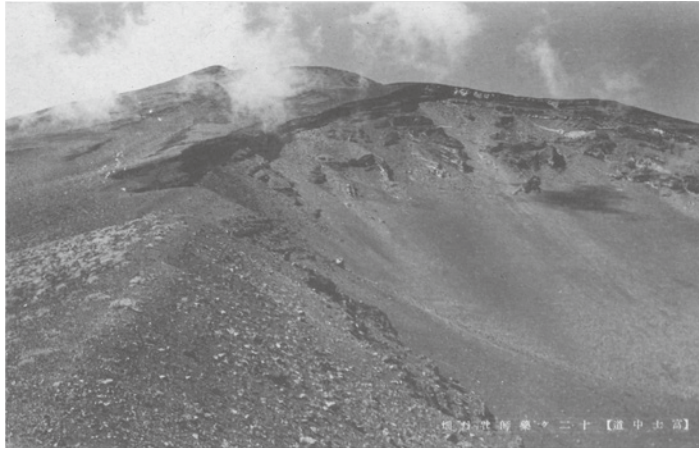


〔御庭方面から小御岳方面を望む〕

御中道のなかで、現在でも通行できるのが、小御岳と御庭・奥庭の間です。地に這うように生えるコメツガやカラマツの樹間にトレッキング・コースが続きます。



1



2

7 富士中道絵葉書

昭和10年代(1935~44)カ

本館蔵

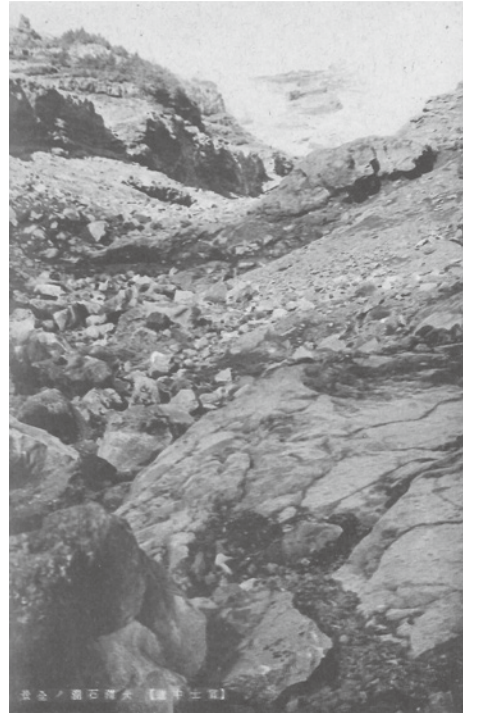
過去に御中道大沢室で発行された絵葉書で、紙袋(右ページ中段左)に10枚ひと組で入った状態で販売されていた。御中道の各所の写真が使用されており、うち数枚には行衣を着て頭に宝冠を戴いた行者や、ズボンやリュックサックを身につけた登山者が認められる。袋の表には富士山とふたりの道者が描かれている。裏には朱インクで、御中道の地名が方角に合わせて押印されている。富士山西側の図柄が多いのは、大沢室で売られたためだろう。



3



4



5



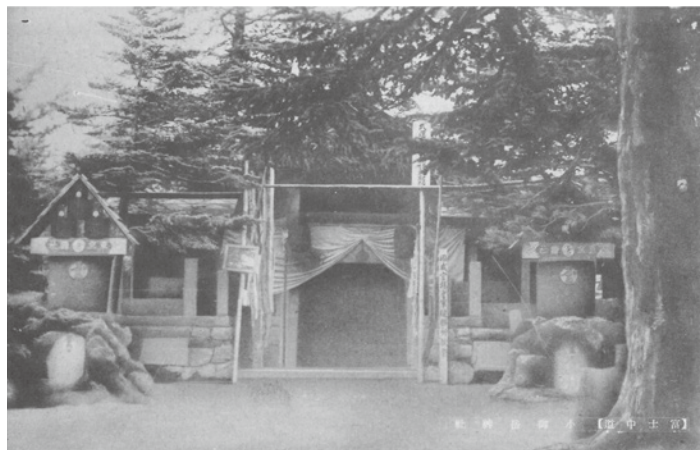
紙袋 裏



紙袋 表



6



10



9



8



7

富士中道絵葉書

- 1 宝永山
- 2 十二ヶ薬師牡丹畑
- 3 天ノ浮橋
- 4 不動岩
- 5 大沢石滝ノ全景
- 6 大沢大行
- 7 三柱神社
- 8 大沢達磨岩
- 9 御庭
- 10 小御岳神社

おおさわむろ 大沢室

御中道最大の難所が大沢^{おおさわぐれ}(大沢崩)である。大小の岩が崩れ続け、刻々と姿を変えている。そのため、「一ノ越」「二ノ越」「三ノ越」と、これを渡る道筋も変遷を遂げた。近代に入って、「二ノ越」の下方に新ルートが開削されている。これを渡ったところに大沢室(大沢休泊所)が存在する。



大沢室「神殿」(三柱神社)



大沢室「神殿」内部

大正9年(1920)以降に増設された「神殿」(三柱神社)の内壁と天井は、富士講が奉納した額(マネギ)で埋め尽くされている。

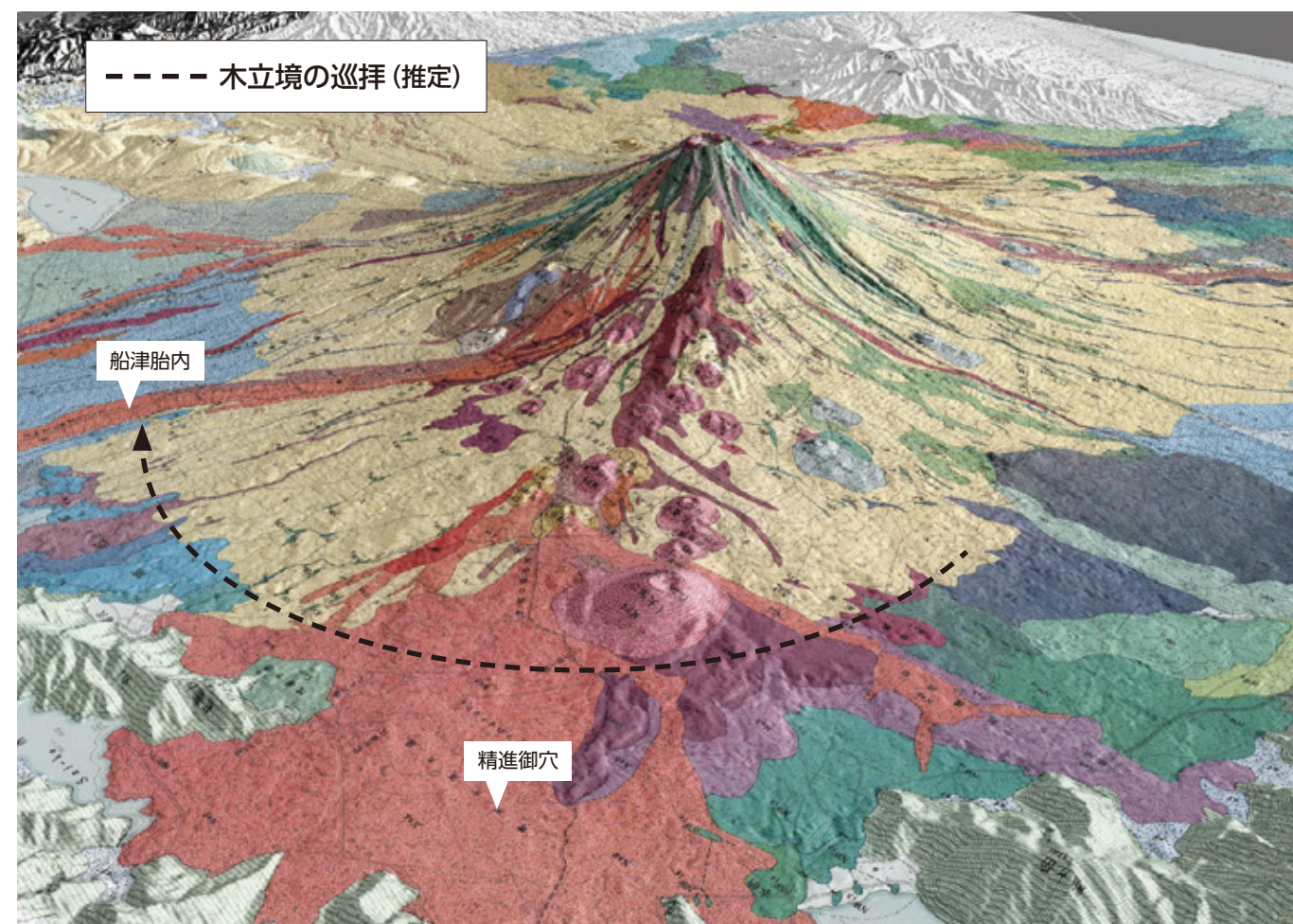


明治十三年
道にこる 心真の
ひとすしに
ふみわけ初し
富士の中道
金山清新道
野州上彦間
金山清

「金山清新道」開削記念銘

山梨県側(右岸)の岩盤に刻まれた銘文から、大沢室を通過するルートが、明治13年(1880)に下野国^{かみひこま}上彦間(栃木県佐野市飛駒町、群馬県桐生市梅田町)出身の金山清により整備されたものであることが知られる。

こ だちさかい 木立境の巡拝行



© Geological Survey of Japan, AIST

富士山を巡拝する修行としては、①山頂火口を一周する御鉢巡、②中腹を時計回りに進む御中道、③麓八海を巡って水行する内八海^{うちはっかいめぐり}巡が知られるが、これら以外に木立境を巡る修行があった。裾野の萱野と森林帯の境の道なき道を、荊を押し分けて進む厳しい巡拝行であった。その行を实践した富士講の記念碑が青木ヶ原樹海中の精進御穴に立っている。この付近で、青木ヶ原^{せいぎやうとくざん}の溶岩原を横断したのだろう。山臣講の誓行徳山(門倉政四郎)を顕彰するものだが、同人は天保3年(1832)9月3日、この洞穴で断食ののち入定^{にゅうじょう}(即身成仏)している。



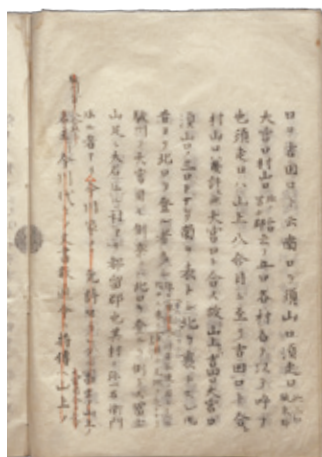
精進御穴の石造物群

6 隔搔録

文政8年(1825)写 個人蔵
縦 28.3× 横 19.7 cm、3冊(全 38 丁)

「江湖浪人」を称した月所なる人物が著した富士山の地誌。序文で森島其進(1761～1821)がまとめた「郡内志」(「甲斐国志」の都留郡にかかわる部分)の「富士山ノ条」に加除訂正を施し、「原文ノ面目」を一新したと述べるが、実際には「甲斐国志」の記述をおおよそぞっている。写本が、山梨県立博物館ほか各所に伝存する。ここには、吉田御師のもとに伝わった写

本を紹介したが、三分冊されているうえに、錯簡も甚だしい。文化13年(1816)の「脱稿」、文政3年(1820)の「再識」、同8年(1825)の「一校了」といった表記や文政8年の春登(時宗の僧侶、西念寺〈富士吉田市)にも住した)による跋文(あとがき)をとまなうので、その成立を検討する材料となりえよう。



(一冊、五丁ウラ)



(一冊、五丁オモテ)

企画展「吉田口登山道と御中道」展示資料

	名 称	成 立	所 蔵
1	上吉田村絵図	江戸時代(19世紀カ)	個人
2	富士山北口本宮富士嶽神社境内全図	明治25年(1892)	個人
3	行衣(麻布山三講・村尾捨三氏所用)	大正時代(1912～26)	当センター
4	富士一山北口明細御絵図面	嘉永3年(1850)写	個人
5	富士山御中道図	文久2年(1862)写	個人
6	隔搔録	文政8年(1825)	個人
7	富士中道絵葉書(全10枚)	昭和10年代(1935～44)カ	当センター

山梨県立富士山世界遺産センター企画展

吉田口登山道と御中道

協力者(順不同)

秋山晃一、天野幸代、志村政文、杉本悠樹、田辺 満、中村 力、中村安彦、林 宏、村石眞澄、伊藤昌光、村尾静彦、富士河口湖町教育委員会、富士河口湖町精進区、ミュージアム都留、国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所

本誌は企画展「吉田口登山道と御中道」(平成30年7月25日～9月24日)の概要を紹介した展示解説である。

実物展示以外の資料も含まれている。執筆・編集は、当センター調査・研究スタッフ(堀内亨・堀内眞・根岸崇典)が担当した。

平成30年(2018)7月25日 発行

編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター

〒401-0301

山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1

TEL 0555-72-2314

印 刷

株式会社 島田プロセス

〒409-8829

山梨県中巨摩郡昭和町清水新居1534

TEL 055-233-8829

〔表紙写真〕

(上段)「上吉田村絵図」、(中段・左)御中道(滑沢付近)、(同・右)「富士中道絵葉書」紙袋(裏)、
(下段)吉田口登山道(二合目付近)、(同・切抜)「富士一山北口明細御絵図面」より